「パパ、またセックスしたくなったの」
「まーね」

私は学園祭の出し物の脚本で忙しいのに、養父でもあり本当は夫であるルイ君に温泉旅行に連れ出された。仕方ないので高級宿の座椅子に座って執筆活動をしていると、いつのまにかルイ君が後ろにきておっぱいをもみやがる。
「私は今忙しいの。夜相手するからね」
「うーん、分かったよ」
そう言いながらルイ君は大人しく、おっぱいを揉むのをやめて、私のためにお茶を淹れてくれた。健気な夫である。
「その貝殻マネーの話で本当に学園祭の脚本書いてるの」
「そうだよ。でもエローい要素排除しないとだね」
「世にも稀な美女と一夜を共にする引換券がお金の起源って発想だよな」
「そうだよ。でも、学園祭でやるのはまずいかなあ」
「分かってるじゃん」
１日に平均一億円の株を取引して、私の学費と食事代を稼いでくれる養父のルイ君。その実態は信用金庫の新人研修の厳しさに耐えられず、３日で逃げ出した社会不適合のペド野郎だ。幼妻法がなかったら一生童貞だったかもしれない。

「歌がいいんじゃないか」
私はそれを聞いて、ルイ君にジブリの女の子みたいに抱きつく。
「て、天才だよ、パパ。リリア歌が得意だし」
「だろう」
お金の素晴らしさをおバカな民（私みたいな）に教育するのに売春が言いと思って考えたプロットであるが、学生演劇に使える訳がない。
私は上機嫌で、ルイ君のヒゲの剃り跡がある頬を撫でてあげる。

「ご褒美に風呂に一緒に入ってくれよ」
ルイくんが耳元でささやく。
「へーい、へい」
私はルイ君のエロ誘惑にのってしまう。
この箱根の行きつけの宿には部屋付きのお風呂があるのだ。でも、衝立の後ろで浴衣に着替えていると
「おーい、早くはやく」
ルイ君の”がっつく”声を聞いて私は冷めてしまう。
「やっぱり、もうちょい脚本練るよ」

「まじかよお」
ルイ君は心底残念そうにして外のお風呂に一人でフェイド・アウト。いい気味だった。私はリリアが歌う姿を想像してドキドキする。でも三十分も経たずに背後に気配が。
「その劇を完璧にするには歌詞も用意しないとだめだな」
ルイ君が浴衣姿で、私の大学ノートを覗き込む。
「ルイ君お風呂早いね」
「瑠海がいないとつまらんからな」
「エロエロ、パパだなあ」
「別にエロだけの目的じゃないって」
ルイ君は悲しそうに言うので、おやっと思う。
「じゃあ、歌詞を一緒に考えてくれたまえ」
私が威張って言うと
「あああ、いいよ」
ルイ君は迷子の犬が飼い主に再会したかのように安堵の笑みを浮かべる。ああ、この人は私に依存してくれている。そう思うと安心する。母子家庭でお金の心配ばっかりして生きてきた私はタップリお金に執着するビッチだ。そういう意味でルイくんと私の関係はウィンウィンに違いない。

「あるう日い、王さまは　貝殻のお金をーー考えたあー♫

お金が分からーぬ国民はー　それは何だと騒ぎ出すう♪♪」
妙に聞いたことあるメロディー（森のク◎さん?）でルイ君が、真剣に歌うのが妙に子供っぽくて笑えた。
（なんだ私はお金と結婚したわけじゃないんだ）
世間ではただのお金目当ての結婚に見えるだろうが、私たちは関係を育んでいる。よーに私には見える……と、感じる。
「もうちょい大人っぽい歌がいいな」
「メロディーしだいだろ」
「そういうもんかな」
私は夕食を持ってきた仲居さんが入ってくるまで歌詞を考え続けた。

「おーい、飯食おうぜ」
「うーい」
ルイ君の資金力は全ての御膳に反映されてる。刺し身は新鮮なだけでなく、超高級な焼き物の器に載っていて芸術作品みたいだ。
「とにかく、高級だね。味の素一切必要なし」
「何言ってんだよ瑠海」
私の不穏な発言にギョッとするルイ君。仲居さんは苦笑いして、出ていった。
「そんなにお母さんの料理は味の素が必要だったのか」
「違うよ。私の料理だよ」
「ああ、お母さん仕事で忙しかったんだね」

お味噌汁は赤味噌で、ものすごく深みがある味だ。茶碗蒸しもホタテが贅沢に二個丸ごと入っている。
「茶碗蒸しにホタテあうねえ」
「はまぐりの酒蒸しも美味だぞ」
このルイ君の定宿は箱根だ。
「小田原で揚がった取れたてらしいぞ」
「いやあ、全部美味すぎる」
御酒を飲まない私はひたすらパクパク食べてるが、ルイ君ビール飲んでいる。
「よくそんな苦い物グイグイ飲めるね」
「苦い物飲むと飯がうまく感じる」
「私も飲んでいいの」
甘えた口調で言うとルイ君が電話をかけて
ノンアルコールビールを注文してくれた。
「ふむ、ビール飲むと食べモノが甘くなるぞよ」
「そうでございましょう姫、ジイの申した通りで」
最近ルイ君と姫とジイやごっこする。
「ジイや、わらわのステーキを細かく切っておくれ」
「姫様、おまかせあれ」
ジイやであるルイ君は私のそばに来てステーキを切ってくれる。
「さあ、姫ご賞味くだされ」
「うむ、ありがとうジイ」
私は松坂牛の霜降りステーキの一切れを口にする。
「う一む、う一一一む、美味であるぞジイや」
「おお、姫がお喜びになられたあ」
ルイ君とふざけあう食事は楽しい。意外にこれが、インスタントラーメンでも楽しめてたりして。

母とは夜一緒に食べても会話がなく、テレビの音ばかり響いていた。仕事で疲れていた母は、ほとんど話さなかった。